

アタゴオルは猫の森

2006(平成18)年9月20日鑑賞(ヘラルド試写室)



第7章

苦手だけど意外な拾い物もある

監督=西久保瑞穂/原作=ますむらひろし/声の出演=山寺宏一/平山あや/内田朝陽/谷山浩子/小桜エツ子/夏木マリ/佐野史郎/谷啓/田辺誠一(角川ヘラルド映画配給/2006年日本映画/82分)

……『アタゴオル』シリーズは30年も続いている人気コミックで、とりわけ「ヒデヨシ」は超人気キャラとのことだが、私にはサッパリ……。スクリーンいっぱい広がる3D-CGの世界も、その色彩感はずばらしいものの、肝心のストーリーと登場してくるたくさんのキャラに興味を持てなければ、いまひとつ……。やはり、これはオッサン1人ではなく、お子様連れで行くべき映画……。

アタゴオルとは？

この映画をきっかけに、また私は新しく、ますむらひろしの『アタゴオル』シリーズという人気コミックがあったことを知ることになった。プレスシートによると、アタゴオルとは、「小さなユートピア、ヨネザアド大陸の一地域。色とりどりの花が咲き乱れ、巨大な葉っぱが天空に向けて生い茂り、夜になれば満天の星がきらめく桃源郷。そこは、2本足で歩き、言葉を話す猫と人間が共存する不思議な世界。力やお金では決してたどり着けない自由の森」とあるが、残念ながら私にはサッパリわからないお話。

また『アタゴオル』シリーズは、1973年に月刊『ガロ』掲載の作品『再会』でヒデヨシが登場して以降、30年間にわたって単行本の販売部数がシリーズで600万部を突破したとあるが、これも「へー」と思うだけ……。さらに、上映直前にプレスシートを読み、どんな物語なのかを理解しようとしたが、やっぱりわからない。したがって、映画の前半は多少居眠りも……？

最近、観る映画の数がますます増えてくる中で、それまで全く知らなかったこんなコミックの世界まで理解するのは大変。そしてそれ以上に、理解して意味があるのかも、正直言って実はよくわからない……？

ヒデオシのキャラが大人気らしいが……？

プレスシートによると、『アタゴオル』シリーズでは、ケタ外れの生命力と無敵の凶々しさを持つアタゴオル最強のデブ猫、ヒデオシ（山寺宏一）のキャラが大人気とのこと。ヒデオシは、遊ぶことと食べることが大好きで、思ったことはすぐに行動に移し、ルールもなく、他人に何を言われても平気で、大好物の紅マグロのためなら友達も裏切る猫らしい。そして、彼の人（猫）生の唯一の信条は、「オレたちは、トコトン生きるために生まれてきたのよーっ!!」とのこと。

プレスシートを読むだけではあまりそのイメージが湧かなかったが、世界征服の野望を抱く、植物の闇の女王ピレア（夏木マリ）と対決するものの、捕まってしまうと自分だけは逃がしてくれと交渉している姿を見ると、私は何と浅ましくイヤな奴かと思ってしまったが……？

ストーリーのポイントは……？ テーマは……？

この映画のストーリーのポイントは、ヒデオシが封印された箱を見つけ、不思議な力や技を持つさすらいの猫、ギルバルス（田辺誠一）の制止も、ヒデオシの親友である人間の少年、テンプラ（内田朝陽）や森の王の娘、ツキミ姫（平山あや）の心配も無視して、無防備にもこれを開けてしまったこと。これによって封印を解かれたピレアは、アタゴオルのすべての生物を、穏やかで主張のない植物に変えてしまおうとしたから、さあ大変……。

ここで詳しくそのストーリー紹介をするつもりはないが、この映画のキーパーソンは、植物の王である輝彦宮かがやきひこのみや（小桜エツ子）。輝彦宮は植物の女王ピレアを封印できる唯一の存在だが、1番強い者を父親にして立派に成長しなければならないところ、輝彦宮が父親としたのは、よりもよってヒデオシだった。ヒデオシは輝彦宮を勝手にヒデコと改名し、意気投合したが……？

なるほど、『アタゴオル』シリーズとは、生物（動物）と植物の対立というそ

んな大層なテーマだったのか……???

その他のキャラは……?

『アタゴオルは猫の森』には、以上紹介したような数々のキャラの他にも、ディズニー映画などとは全く異質の面白いキャラがたくさん登場する。その第1は、竜の落とし子の形をした、ピレアの理知的な第一の配下、竜駒（佐野史郎）。彼は、ピレアと共に長い歴史を生きていて、体はすでに干からびているらしい。第2は、セミの形をした網弦（谷啓）。彼は、歴史を見守って生きている“目撃師”で、そのため気が遠くなるほど長生きをしているらしい。第3は、テマリちゃんと呼ばれる、先祖代々の占い師であるテマリ（谷山浩子）。

植物の形をした闇の女王ピレアの側につくのは竜駒だけで、他はすべて反ピレア勢力だが、よくまあこれだけいろいろなキャラを考えつくものだと感心……。

ひどい日本語にウンザリ……

ヒデヨシはそういうキャラだから、そのしゃべり方にも大いに特徴があるが、私に言わせればそれはかなりひどい日本語……。したがって、その影響を受けて育った輝彦宮＝ヒデコの言葉遣いもかなり荒っぽいもの。9月20日に自民党総裁に選出された安倍晋三の公約の柱は、憲法改正とともに教育基本法の改正。そしてそのココロは、日本人が正しい日本語を使うことが大切で、それが教育の出発点だということ。ヒデヨシは言葉を話すけれども、猫だから多少その言葉遣いが乱れているのは仕方がないとしても、アタゴオルには人間が共存しているのだから、もっとちゃんとした言葉遣いをヒデヨシたちに教えてやらなければ……。

3D-CGは好き、それとも……?

この映画の特徴の1つは、原作で創造されたそれぞれの登場人（猫）物のキャラや、アタゴオルの世界そのものを美しい3D-CGの技術によって描き出したこと。私としても、その豊かな色彩感をはじめとする美しさは認めるものの、そういうものを映画としてスクリーン上で観たいかどうかは人の好みによって分かれるもの。そして、私はどうもこういうものがあまり好きではないから、途中で

居眠りしてしまったのかも……。

石井竜也の音楽は好き、それとも……？

米米 CLUB の『君がいるだけで』がレコード大賞を受賞したのは1992年だから、既に14年前の話。ボーカルの石井竜也をはじめ、メンバーそれぞれかなりけったいな服装だったが、米米 CLUB の曲はもちろん、ステージセット、コスチュームなどを総合的にプロデュースしていたのが彼とのこと。

米米 CLUB を1997年に解散した後の彼のソロ活動はあまりパツとしないが、映画監督や総合プロデューサーやパーソナリティなど、多方面にわたってその才能を発揮していたらしく、その才能がこの『アタゴオルは猫の森』の音楽監督として活かされているとのこと。しかし、映画の中で流れる楽曲を聴いても、スクリーン上で踊る猫たちのステップ(?)を観てもわりとワンパターンという気がしたが、それは私の理解力不足のせい……？

2006 (平成18) 年 9 月21日記

ミニコラム

まるで動物並み？ 若者たちのあきれた日本語

今ドキの若者の国語力は、「動物並み」はチト失礼すぎるとしても、「中学生並み」がほぼ妥当な評価。安倍総理が教育再生に熱心なのは、そんな危機的な現状認識にもとづくもの……？

格差の著しいアメリカで、下層階級の貧しい若者たちが好んで使うのが「Fucking」という言葉だが、その日本語版が「ムカック」……？ 私たちが学生運動をやっていた頃の決めゼリフは「ナンセンス！」だったが、これ

は議論に役立つ言葉だからまだマシ……？ 国語力の改善のためには何が必要か？ その答えは明確で、ケイタイやパソコンメールの使用を減らし、私のように日々鉛筆をナメナメ原稿を書くことと声を出して文章を読むことに尽きる。そんな基本に戻って教育を再生しなければ、若者たちの国語力はいずれ動物並みに。そしてそれは当然、日本国の一大事……。

2007 (平成19) 年 3 月 9 日記